

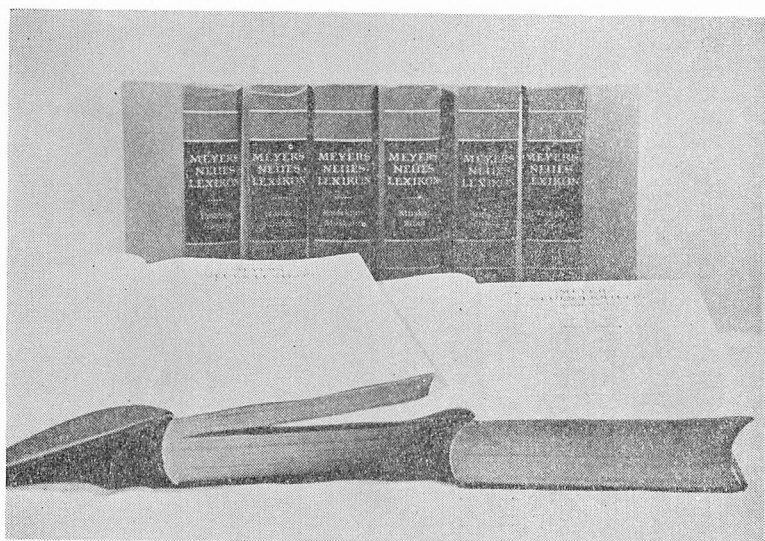
第十二章 案内と宣伝

一 百科全書と叢書

洋書の輸入に際して最も力を入れたのは百科辞典であつたから、これだけは是非記しておかなければならないだろう。と云うのは、百科辞典は巻数も多く、それだけに金額が張るものであるから、財界不況の時、たとえ予約販売と云う堅実な商法を採つたとしても、可成り冒険を含む事業であつた。それにも拘わらず、敢えてこれの輸入に

書	名	冊数	予約開始期	予約部数
マイエル新百科全書(第七版)	同補遺	一二三	大正十四・八 昭和五・九	五〇〇 約五〇〇
大英百科全書(第一三版)	同補遺	一六四	昭和三・十	二〇〇 四九
シーボルト 日本	同補遺	一	昭和四・八	二〇〇 八
ブロックハウス大百科辞典	同補遺	二〇一	昭和四・九	二〇〇 九
イタリー大百科全書	同補遺	三六	昭和四・九	四〇〇
社会科学百科全書	同補遺	一五	昭和六・十二	五二〇
マイエル小百科全書(第八版)	同補遺	三		

ふみ切つたのは、わが国洋書輸入業者の第一人者であると云う矜持があつたのと、海外の声望を一身にあつめる試金石でもあつたからである。果せるかな、この試みは徒勞ではなかつた。そののみか、内外の興望を獲ちとつて同業界中に磐石の基を固むる成果を収めた。今ここでは順序を追つてその次第を略述して見よう。先ず此の期における取扱書名、年次



マイエル新百科全書

等を表にすると、前掲の通りである。

マイエル百科全書 Meyers Lexikon

明治三十七年、第六版が発売された時、試みに取扱ったのが縁となり、大正十四年に第七版が出版されると共に、予約募集を開始した。菊倍判（縦約三三 cm、横約二四 cm）の大型のもので全十二冊、昭和五年に至って完成した。販売価格は初め一冊十八円であったが、のち為替相場の変動で十五円に値下げしたから、売り易くなり、完成後発刊された補遺三巻も、本巻の予約数と略同数である凡そ五〇〇部の申込を受けた。同小百科全書も又、明治四十年に第七版が販売された時に取扱ったことがあったから、昭和六年に第八版が出版されると、その予約販売を行って五二〇部の申込みを得た。全三冊共並製は総麻くるみで価格は十一円五十銭、上製は背皮革装幀で十二円七十五銭で販売された。



Siebold-Nippon 内容見本

大英百科全書
Encyclopaedia Britannica

これの月賦販売を最初に行ったのは明治三十五年で、第九版二十五冊で完結していた。その後出版された第十二版は、War Supplement 三巻を追加したものであるが、第十三版では更にこの補遺が改版して加えられ、本巻と合せて三十二冊分を十六冊に改装している。

シーボルト「日本」(Nippon. von Ph. Fr. von Siebold)

シーボルトの第一〇〇回の誕辰を記念して、その著「日本」を複製したことについては、前編に於いて木村毅博士が詳述されているが、その後シーボルト一三〇回誕生を記念して旧著の複製が、ベルリンの日本学会の手によって計画された。そしてこれが編集に当たったのがドクトル・エフ・トラウツ(Dr. F. Trautz)で、またその刊行を引き受けたのが、エルンスト・ワスマート(Ernst Wasmuth)会社であったが、この出版は非常に特殊なものであっただけに、出版並に販売はまことに至難な事業でもあった。そこで同社も大事を取り、全世界から二〇〇部の予約注文があれば印刷に着手する案を立て、各国の書店に引き請部数の問合状を出した。丸善に対しては、昭和三年の夏にその問合状と印刷見本を挿入した大形の出版要綱約五〇〇枚を送って来た。その内容見本が余りにも立派

であつた為、税関吏は本ものの書籍並みに取扱ひ、何十円かの輸入税を徴収すると云う笑えない話が伝えられている。ところで丸善に見れば、出版者側が余りに過信しているのに驚き、慎重に凝議の末、これと思う顧客にその内容見本を送り、極力予約購読を勧誘した結果、二〇数名の申込者を獲得することが出来たので、翌四年三月日本に於ける総代理店になることを条件に、五〇部の引き請けを回答した。この回答後あらゆる宣伝機関を動員して宣伝勧誘につとめ、現品到着前に四十九名の予約申込を獲得したので、更に勇を鼓して六部を追加した。その他、別の書店を介して直接出版社に注文した二部も丸善に委譲されたから、丸善が取扱った分は合計五十八部になった。尚、複刻版「日本」の最後の巻に予約者の氏名が掲載されており、それによると世界的に有名な書店でさえ三部程度の注文にすぎなかったのに、丸善の注文数が、出版総数の二九%を占め、他の書店の申込と比類のない程隔絶し、出版社をいたく感激さすと共に、日本人の文化に対する関心の深さを世界に宣揚したのであった。

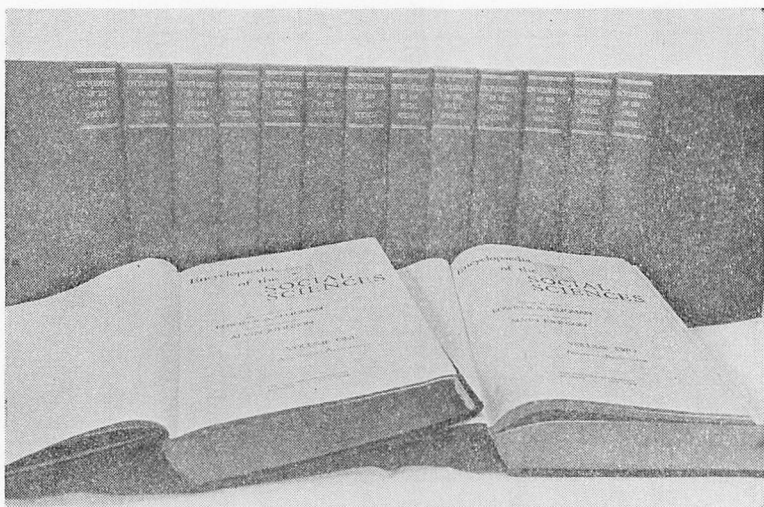
ブロックハウス大百科辞典

Der grosse Brockhaus. Handbuch des Wissens

この大百科辞典二十巻の取次販売も、ドイツ語研修者や、ドイツ文化に興味を持つ人々の間に大いに喜ばれ、昭和三年十月第一巻の発刊以来、四か月毎に一冊配本され、普通版は総布くるみで販売価格十一円二十五銭、上製は背革装幀で十四円五十銭の高価であつたにも拘らず、完結までに約二百部を売捌いた。

伊太利大百科全書

Enciclopedia Italiana



セリグマン社会科学百科全書

全巻三十六冊、その代価二、四四二円という高価なものであったから、一般の需要を期待するわけには行かず、従って「学鑑」や「アナウンスメント」への広告は一切取り止め、各大学図書館等に説明書を送って予約申込みを求めた。その第一巻は昭和四年八月に出版され、全三五巻と索引一卷が完成するまでには、約十年の歳月を闊したためでもあろうが、予約部数はわずかに九部に過ぎなかった。これは一つにわが国では、言葉の関係で需要が少なかったためであった。然し本の出来具合も立派で、世界中の百科全書では優秀本の一つであり、今日尚その補遺がつづいている。

社会科学百科全書

Seligman-Encyclopaedia of
Social Sciences

一般にセリグマンの百科辞典と云われている此の辞典はその名が示す通り、極めて特殊なものであるが、日本の学界に貢献する処が大きいと考えられ、それだけに申込みも殺到す

るものと予想されたので、全十五冊四〇〇部を引き受けることにした。第一巻が刊行された昭和四年九月は、欧州金融界の不況が底知れぬ泥沼に追い込められ、同十月末には米國株式市場の大暴落により、世界的恐慌に拡大発展した時であったから、一冊十六円五十銭は予約者にとっては大きな負担になり、各国での解約者が続出する状態であった。しかし丸善は堅実な顧客の支持をうけていたから、これに煩わされることなく、注文額を減ずるような不手際もなかったので、出版元のマクミラン社から感謝状が贈られ販売の労を犒われる程であった。将来両社が営利を度外視して親善の情を深めて今日に至っているのも、こうしたことが契機をなしたからだと云える。

二 アナウンスメント

以上の百科辞典類のうち、特殊な語学力を必要とする「伊太利大百科全書」以外は、大体「学鑑」や「アナウンスメント」に載せられ、周知宣伝の方法がとられたと云われているから、ここでは一応「アナウンスメント」の由来について考えて見よう。それには元社員齋藤哲郎の「丸善生活五十六年間の思い出」(丸善厚生会誌三十号)に、次のような記事があり、これが発行の経緯を充分語りつたえているので、ここに転載しておく。

今日「アナウンスメント」の表題で発行されている新刊洋書のリストは、昔は「学鑑」の一部となっていた。

その編集も洋書目録と同一性質のものであるから、目録係のわたしの仕事の一部となっていた。ところが時代の変せんとともに、「学鑑」との分離の提案がでて決定されたときまず問題となったのは、題名をどうするかということであった。各方面からいろいろの案がだが、甲論乙ばくで仲々まとまらない。はては懸賞募集の

説もとびだしたりして題名選択にはてこずった。わたしはともかく編集当事者であるから責任上、何とかまとめなくてはならない。そこで一策を案じ、広く英米出版所の広告印刷物をあさり、十ばかりのことばを拾って会議に提出した。その中にハイネマンズ・アナウンスメント・オブ・ニュウ・ブックスというのがあった。幸いこのアナウンスメントということばが皆様のおめがねにかない、満場一致という形でマルゼンスアナウンスメントと決ったのであった。これがマルゼンアナウンスメントと改められたのは戦後のことである。

この記事によると、大正初期には独立した新刊洋書リストが未だ存在しなかったことになる。しかし新刊輸入洋書類のうちで、耳目をひくようなものには、半頁または一頁大の広告を「学鑑」に載せていたが、その他のものは、創刊間もない「学鑑」明治三十年五月発行の第三号 *Monthly Bulletin of International Bibliography* 欄に逐次掲載紹介することにした。分類の仕方も極く雑駁で、適当な項目がない場合は、内容に従い、それに近い種目のうちに雑居させてしまうような有様であった。今参考のため、大正六年頃の分類法のものと比較対照すれば次の通りである。

大正六年十月二十日号	明治三十年五月号
Agriculture, Gardening, Forestry etc.	Agriculture
Amusements & Sports	Architecture, Building etc.
Architecture & Building	Astronomy & Meteorology
Astronomy	Biographical Works
Biography	Chemistry

Chemical Technology & Manufacture	Commerce & Banking
Chemistry	Composition & Rhetoric
Commerce & Commercial Economy	Dictionary, Encyclopaedias & Other Books of Reference
Education	Domestic Science & Economy
Electrical Engineering	Educational Works
Engineering	Electricity & Magnetism
Fine Arts & Music	Engineering & Mechanics
Geography & History	Fine Arts
Language & Dictionary	Geography
Law	Geology & Mineralogy
Literature	History
Mathematics	Japan, China etc.
Medical & Sanitary Science	Language
Mining & Metallurgy	Law Books
Natural History, Biology, Botany & Zoology	Literature
Naval & Military Science	Manufactures & Industrial Arts
Philosophy & Religion	Mathematics
Physics & Science in General	Medical Books
Political Science	Metallurgy & Mining
Sociology & Economics	Military & Naval Science
Great War	Natural History & Science
	Natural Philosophy
	Philosophy
	Political Economy & Political Science
	Theology & Religious Books

(「学鑑」の分類法による)

昭和四年一月一日号	大正十三年三月十五日号	大正十年一月一日号
Religion, Philosophy & Education Theology & Religion Philosophy & Psychology Education Social Science Sociology & Social Politics Statistics & Year Books Law Political Science Economics, Commerce etc. Philology, Literature etc. Languages incld. Encyclopae- dias Literature Poetry Dramas & Theatrical Arts Motion Pictures Novels, Romances & Stories Fairy Tales & Juvenile Books Journalism, Newspaper etc. Bibliography, Library etc. Fine Arts, Recreations etc. Fine Arts Architecture Music Photography Amusements & Sports Domestic Science & Etiquette	Law, Political Science, Sociology & Social Politics Economics & Commerce Religion, Philosophy & Education Language & Dictionary Literature Fine Arts & Architecture Geography, History, Biography, An- thropology, Antiquity & Archaeology Domestic Science, Amusements & Sports Agriculture & Live Stock	Section 1 Social & Political Science Law & Political Science Sociology, Economics & Statis- tics Commerce & Commercial Economy Section 2 Philosophy, Religion & Education Language & Literature Dictionary Novels & Romances Poems & Dramas Architecture & Fine Arts

Natural Science Mathematics Astronomy Physics & Natural Science in General Chemistry Physiography & Geology Biology Botany Zoology Medicine Productive Arts Agriculture, Gardening & Forestry Live Stock & Fishery Chemical Technology & Manufactures Engineering in General & Civil Engineering Mechanical Engineering Electrical Engineering Mining & Metallurgy Naval & Military Science Aerial Navigation & Automobiles Geography, History etc. Geography, Maps & Atlas History Biography Anthropology & Archaeology Eastern Asia & its Neighbours	Mathematics, General Science, Physics & Chemistry Chemical Technology & Manufacture Engineering (Mechanical Engineering, Civil Engineering & Electrical Engineering) Biology Physiography & Geology Mining & Metallurgy Naval & Military Science Motorcar & Aeronautics Medicine	Musical Amusement & Domestic Science Geography, History, Biography, Anthropology etc. Section 3 Science & Industries Chemical Technology, Manufacture & Agriculture Engineering, Mining & Metallurgy Naval & Military Science Aeroplane & Motorcar Chemistry & Physics Natural Science & Mathematics Medical & Sanitary Science
--	---	--

(「アナウンスメント」の分類法による)

このように初めは「学鑑」に載せていた輸入洋書目録も大正初年ごろから、洋書の輸入量が激増して毎月一回発行の「学鑑」の洋書案内では間に合わなくなり、新たに大正六年七月から「アナウンスメント」として一本立ちして、顧客の前にお目見得をしたのであった。独立した時の「アナウンスメント」の発行回数は毎月一回であったが、輸入量の増大と、着荷状況を迅速に報道する必要があるから、昭和五年九月より毎月五日・十五日・二十五日の三回発行に改めた。(九一六―九一七頁の表参照)

尚、ついでながら、編集上の事情から昭和十二年三月から発行日を十日と二十五日の二回に縮小されるようになった。

話は大分理屈っぽくなったので、このあたりで息抜きのため、笑えぬ笑話を一編挿入しておこう。前述した「アナウンスメント」の発行は、勿論商法の常道を行くものであるが、一方顧客に対するサービス精神がなくては考え出されるものではなからう。そこで話というのは、このサービス精神と「石橋をたたいて渡る」手堅い丸善商法に、大きなボカをやったことである。諺に云う「上手の手から水が洩れた」のである。

昭和五年四月、エチオピアのハイル・シユラシエが、前帝から譲りをうけて帝位に即いた。その戴冠式に、わが国政府が代表として派遣したのが駐土大使吉田伊三郎で、彼は此の年から八年までトルコに駐在していた。戴冠式は首都アジス・アベバで行われ、吉田は特命大使としてこの式典に列席した。式後皇帝に直接お目にかかった時、「アサヒグラフ」の創刊号からその時まで発行された全巻と、その他一、二点の日本書籍を取りそろえて送ってもらいたいとの申し出があった。吉田はこれを快諾し、トルコに帰る車中でこの旨を認め「洋書の丸善」へ発注した。

その手紙には「代金は皇帝秘書宛請求すれば、直接送金される」と云う簡単な指図までつけ加えてあった。吉田が「洋書輸入商丸善」を特に撰んだのは、外交官として日ごろ洋書に親しんでいたから、咄嗟の才覚で丸善に注文したものだと思われる。それは兎も角として注文を受けた丸善外国通信販売部門では、このような場合、前金を受けるのが建前であったが、紹介者が出先きの大使であり、注文者が一国の元首であって見れば、そのようにお堅いことは言っておれず、係では早速オープンa/cで、大使の指図通りに送品した。(尤も「アサヒグラフ」の方は、已に何冊かが品切れがあつて完全に揃えることは出来なかつたが。)

送品は梱包の大きさや重量などの関係で、止むを得ず小包郵便扱いにしたから、到着までには三か月位かかり、折返し支払いがあるとしても半年先きには、代金が入手出来ると見込んでいた。だがその半年が来ても何の音沙汰もないので、係のものは事務処理上支払い催促の手紙を書いた。勿論相手が相手であるだけに、一般並の催促は出来ず、極めて鄭重な文体をとり、支払いを乞うたが、一向に返事がない。そこで頃合いを見計つては、再三再四、英文または仏文で督促をくり返したが、数年に及んでも尚且つ何等の応答に接しない。会社としてはこのような未決済の債権をいつまでも抱えていることは出来ないもので、何年かのちの決算期に、回収不能の勘定として売掛金を帳簿から落してしまつたと云うのである。

金額は定かでないが、凡そ百六、七十円位で、当時としては仲々の大金であつた。しかし一国の皇帝にしては支払えない金でもなかつたろうに。おそらく秘書官の落度も知らない皇帝は、結構楽しんでたことであろう。そして吉田大使も帰国後程なく逝去したから、そんな丸善の迷惑は露程も知らなかつたであらう。——これがその笑話

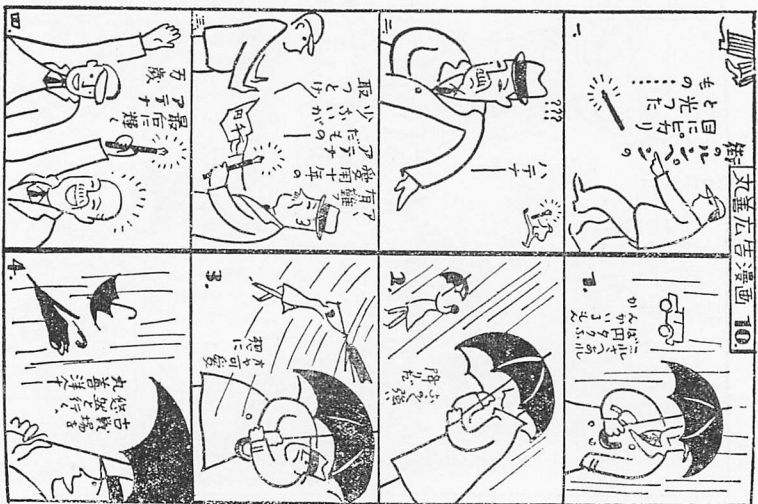
である。

三 広告漫画の出現

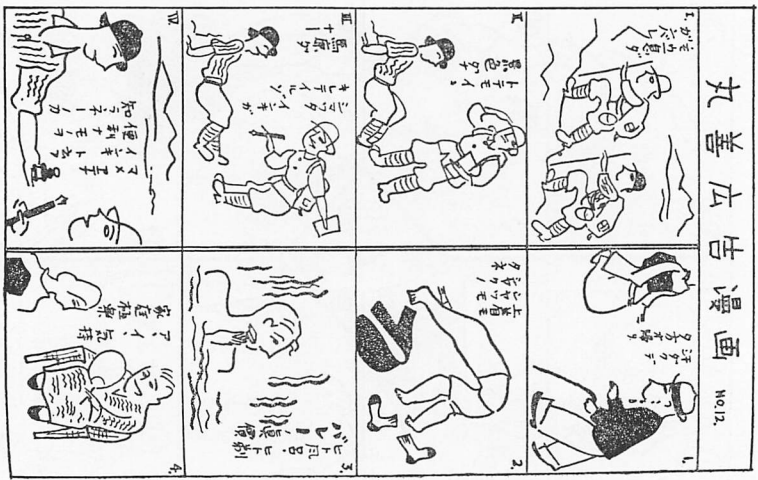
さて「学鐙」の方は、一体どのような歩みをつづけていたのだろうか。PR誌として特殊な編集をつづけていた内田魯庵は、昭和に入っていくばくもなく、身体の調子をこわして欠勤勝ちとなったため、堅田悠久を中心とする広告課が合議で彼の仕事を踏襲して行った。内田魯庵は昭和四年六月に天魔に魅せられて他界したが、それ以後しばらくは専任の編集者を置かず、昭和五年六月から水木京太（筆名東司郎）が登場するまでは、前述の合議制で編輯・印刷・出版の仕事が行われて来た。ただここに特筆すべきは、「学鐙」広告欄に漫画が連載されたことであった。

日本に於ける近代漫画の起源は、文久二年春頃横浜居留地の外人の手によって発売された「ジャパンボンチ」と云う絵雑誌であると云う。原語は Japan Punch であるから日本の洒落本と云う意味であろう。これに地口を合して仮名垣魯文が、明治七年「絵新聞日本地」^{ボンチ}を発行したのが、日本人が画いた最初の漫画雑誌であった。その後の流れを汲んで「団々珍聞」^{まるまるちんぶん}（明治十年三月刊）や「二六新聞」（明治二十六年十月刊）が現われ、明治三十八年北沢楽天が「東京バック」を創刊して一紀元を画した。Puck は英語で、いたずら小僧を云い、彼は曾て「時事新報」に時事漫画をのせて、時勢を諷刺した戯画に筆を駆使したことがあったが、ボンチをバックに置き換えて新分野を開拓した。漫画の名付親は不明であるが、大正四年に東京漫画会が組織されており、のち漫画祭と称して地方に進出

丸善広告漫画 10.



丸善広告漫画 No.12.

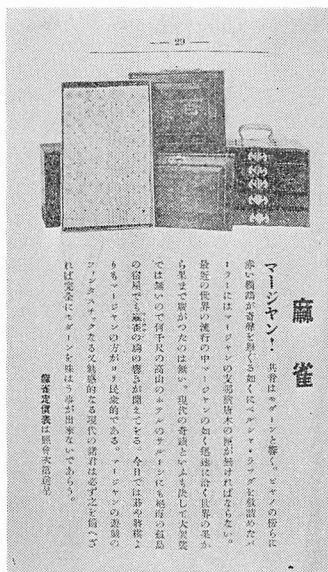


広告漫画 (学燈より)

したのがその始まりであるといわれている。その後、岡本一平が大正十年五月二日から「東京朝日新聞」にユーモアに富んだスケッチを掲載したことから漫画ブームを呼び起した。

「学鑑」の編集者が、読者との親和を計り、兼ねて営業種目を宣伝するために、漫画を採択したのは極めて賢明な方法であり、また憂鬱な時風を一新せんとする野望がそうさせたからでもあったろう。兎に角、行うべくして行えなかった試みがここに実現したのも、或いは広告課員の自由討議の賜物であったと云えよう。筆者は広告課員松本茂雄で、昭和五年八月から始まり、同六年七月に終るまで十二回の連載は、定めし顧客に微笑を与えたことだろう。これは、非常に珍しい試みであるから、数点を収載しておく。

このように大正から昭和にかけては、レジャーやスポーツに関連する用具や、ガイドブックを相当数仕入れ、漫画はこの宣伝に大いに役立った。



麻雀 (学鑑広告)

麻雀が中国の遊戯であるのは衆知のことであるが、これがわが国に紹介されたのは、明治の中期ごろであった。しかし輸入当初は一部の上流階級に普及したのみで、未だ一般化するに至らなかった。それが急速に広まったのは大正十三年以後で、丸善もこの頃から店頭で陳列し、昭和二年四月号の「学鑑」広告面で麻雀用具の紹介をしている。

スキーやスケートの導入も、その歴史は極めて古く、明治四十一年、札幌農科大学にそれぞれ一台ずつ齎されたのが、その始りと云われ、特にスキーは同四十三年に新潟県高田の第五十八連隊の必須訓練科目として取り上げられてから、一般の関心と呼ぶようになり、ついに愛好者の間にスキークラブの誕生を見、昭和三年国際スキー連盟に加入してから、急に注目されるようになった。スケートも又、自然氷場を利用する関係から、練習期間が短期間に限られていたため、発達がおくれたが、昭和になって東京、大阪、京都、名古屋等に室内人工結氷スケート場が建設されるようになってから、四季を通じての練習が可能となり、急速に発展した。昭和二年ごろの丸善の洋書目録を見ると――

Barne J. M.- Picture Analysis of Golf Strokes

White, J.- Easier Golf Brown G. S.- First Steps to Golf

Collett, G.- Golf for Young Players

Golf Suits, English Made Guide Book for Golf, 7 Books

Skating with Bror Meyer Wintersports für Jedermann

Skating English, International Speed

Jessup, E.- Snow and Ice Sports

Benson, E. F.- Winter Sports in Switzerland Ski, 33 Books

のような初心者向けの案内書が載っている。右の目録中には、ゴルフの指導書も掲載されているが、ゴルフがわが

国に初めてお目見得したのは、明治三十六年で、当時神戸に在住した外人たちの間で、神戸ゴルフクラブがつくられたのが、その濫觴であると云う。しかし広大な面積を占有し、その管理に莫大な費用を必要としたから、流石にわが国の金持連中も、手をつけ兼ねていた。ところが大正年間になると漸く東進し、横浜の外人間にもこれをたしなむものが増加し、横浜の保土ヶ谷や根岸などにゴルフリンクが設けられるようになり、在京の外人や富豪たちも、車を馳せて一日の清遊を楽しむものが多くなり、大正十三年には、日本ゴルフ協会（J・G・A）の誕生を見るに至った。しかし庶民にとっては、未だ高嶺の花であり、その上甚だしい不景気づきでは、クラブを握るより、パンのし棒を振う方がより切実であったから、このスポーツも一部の有閑階級の間に行われるのが関の山であった。そうした状況にも拘わらず、丸善がこの種の案内書を輸入するばかりか、更に高級ゴルフ用具を輸入して、「学鑑」への広告は素より、いろいろな方法で宣伝にとめたのは、何がためであろう。海外の新奇なものに目をつけ、これを逸早く輸入して江湖に紹介するのは、丸善の伝統的なバイオニア精神の然らしむる処であろうが、採算のない商売に手をつける筈はなかったから、外人や貴顕紳士を顧客として充分、勘定が合ったものと思われる。

四 洋物の展覧会

丸善商法の特徴は、こうしたバイオニア精神の堅持と、時代を啓蒙して新製品の販路を拡張することであった。その現われの一つとして洋物部の取扱った二つの展覧会を挙げることが出来る。即ち一つは「趣味の帽子展覧会」（昭和三年三月十日～三月十四日）であり、もう一つは「趣味のネクタイ展覧会」である。

前者の陳列品はイタリーのボルサリノ会社の資料を主として、これに取締役鈴木仁一郎が社長をつとめていた帝國製帽株式会社の資料や新製品を添えたもので、陳列の種目は、

一、帽子の製造工程

一 三点

二、帽子の歴史的展覽（手工業時代）

二 六点

三、帽子の歴史的展覽（製帽機械發明後）

一 四点

四、植民地に用いられる現代の帽子

一 四点

五、今昔の流行帽子

一 四点

で、予期以上の人気を博したから、会期終了後、これをそのまま大阪支店に移して、引続いて開催し、相当の成績を収めた。

また後者の展覽会に出品されたものは、

一、ネクタイの製造工程

一 三点

二、フランスに於けるネクタイの歴史的変遷を示す絵画

五 九点

三、十九世紀末のネクタイ実物

五 九点

四、現代に用いられる特殊のネクタイ

三 五点

五、現代のフランスに於ける有名な会社自選品の即売出陳

千点以上

六、国産優秀ネクタイ特選品

数百点

など二、〇〇〇点にも及び、特に会場には、ルチーカ織機一台を備えてネクタイ製造の実演を行い、マネキン人形三個は、わざわざフランスから輸入して会場に光彩を添えた。殊にこの展覧会の白眉とも云うべき「フランスに於けるネクタイの歴史の変遷を示す絵画」五九点は、フランスの画家バレンタイン・ムニューに委嘱して画かせたもので、画伯は国内の各博物館、図書館保管の参考資料を模写し、半歳の時を費やして完成したという。従って開催前にこのことを聞き知った、社内外の要望に應えるため、この模写画を更に絵葉書に複製して会場で即売した。この他、同年初頭にフランスで上梓された“*Histoire de la cravate en France*”と云う論文を入手し、これに基づいて「ネクタイの話」と題した小冊子約三、〇〇〇部を印刷して配布した。これはその内容にふさわしくするため、石版九度刷の表紙で飾った小冊子とは云え仲々の豪華本であった。この展覧会も又好評を博したので、引続き各支店でも展示され、一部は卸部取引先の要請で資料を貸与する程であった。



「趣味のネクタイ展」絵葉書

ここで一つ、当時勃興した皇道主義の圧迫があったにも拘わらず、丸善が看板の一つである輸入洋品の販売を止めなかったたぐましい商法に関する一挿話を載せておこう。それは当時洋品課員でのちの洋品部長戸所道宣の懐古談によるものであるが、何しろ凡そ四十年前の思い出話であるから、いささか記憶違いもあるが、それはそれとしても、仲々面白い話である。その頃、浜口内閣から第二次若槻内閣にかけて二代鉄相を勤めた人に江木翼が

丸善
スペシャルセール

振出物が詰りとなる
——
お待ち兼ねの日来る！
——

紳士用
婦人用
児童用
洋品 雑貨 類

品豊富・連日新品追加

廿六日 卅日 午前九時—午後五時

日本橋通——
本社階上



スペシャルセールの案内葉書

訪れて靴下を所望した。国産居士で店内に知れ渡っている彼のことであったから、気の利いた店員の一人が、早速外国製を示すラベルをはがして、お買い上げの榮に浴した。話がここで終れば何んでもないのだが、後日江木が来店した時、件の店員をつかまえて、「アレは正しく輸入品である。ごまかしたって俺の目は節穴でないわい」と叱咤一発。ことの次第は、江木が帰宅後、靴下を取り出して裏返した処、外国商社のネームが出て来たと云うのである。そう云えば当時の洋品課にはアイデアマンが沢山いた。係長の永島咲三はもとより、年少課員にもそれぞれ特徴をもった人たちがいた。丸善洋品スペシャルセールの始めたのが、昭和五年十一月で、このアイデアは最年少課員の戸所道宣の発案であった。堆積した売れ残りの洋品に、新しく輸入した靴下などを混ぜて年一回の投げ売をしたのだが、これが大いに顧客の人気を呼び、スペシャルセール、クリアランスセールの名は満都に浸透し新しい流

いた。彼は民政党はえぬきの闘士で、第一次加藤高明内閣の書記官長を勤め、反対党に対抗して一步も譲らなかつた硬骨漢でもあった。身は鉄相であつたが、浜口緊縮内閣の推進力をなし、国産品奨励を慫慂して止まなかつた。そんな男であつたが、また丸善の常客でもあった。それが丸善に来て洋品の陳列を見ると、必ず「外国品をおいてはいかぬ。須らく国産品を展示すべきだ。」と云つたものである。ある日彼は丸善を

行語となった程であった。